

2023. 12. 31. 主日礼拝説教
聖書： マタイによる福音書8章1～4節
『癒しの物語とは何か』

「重い皮膚病を患っている人をいやす」という小標題が掲げられます。

5章から7章まで続いた「山上の説教」もようやく終わり、この8章から9章34節までは、それまで積み重ねられてきた「言葉」だけの問題提起ではなく、新しく治癒物語という「行為」を上乗せし、それによって深く人の存在そのものの意味が問い直されてゆきます。ここには12の物語が含まれています(8;1-9;34)。その多くが治癒、つまり奇跡物語という文学形態を用いつつ、そこに登場する人々を「山上の説教」より以上に、一層鮮やかに浮かび上がらせようとマタイは試みます。

数多く登場する癒しの対象の中から、そのトップバッターとしてマタイが選んだのは本日登場する「重い皮膚病患者」でした。

当時は現代と比ぶべくもないのですが、ある程度の公衆衛生、つまり予防医学は存在していました。しかし、多くの病いは一端発病してしまえばほぼお手上げ状態でした。病気は二種類に大別されました。一つは伝染病などの致死性の高い病いです。対処方法は皆無です。もう一つは本日のらい病に代表される感染性や致死性の低い病いでした。対処方法は隔離です。わが国でもこの隔離状態が20世紀後半まで続き、多くの方々が差別と偏見の中、人権を奪われていったことは記憶に新しいことです。殊に当時は医療と宗教が未分化の時代です。ハンセン病は医学的な事柄というより宗教的な評価を下される病いであり、診断も祭司が行っていたくらいです。患者は「汚れた者」と呼ばれ、家族はもとより一般の人には2メートル以内に近づいてもならないし、風上にいる場合は50メートルは離れていなければならなかったといわれます。なんと酷い話でしょうか…。

病いは肉体を犯すが、治療は精神を犯すという、このような患者への扱いはこの後も長く続くのです。マタイは集団維持のために1を切り捨て99を保全するというユダヤ教のしきたりに疑義を持っていたのでしょうか。憎むべきは病いであり患者ではないということです。彼は患者の生の声を掲載します。「主よ、

御心ならば…」(2)と。そして、そこにイエスが臨在されるのです。イエスの側から、つまり初代教会の側から彼ら彼女らに歩み寄り、出会いを持ち、寄り添い、受け入れたのです。患者たちの絶望に満ちた隔離の場がそのまま慰めに満ちた恵みの場、福音の語られる場へと変換されてゆく刹那をマタイは描き出したのです。

運命などという言葉を使うと、それはとてつもなく非情な響きを携えているように受け取ってしまいがちです。そして、それに対して人はいかに弱く無力なものかと納得させられてしまいます。しかし、自分の周りがすべて暗く閉ざされたそのような時にも、なお上に向かって目を上げる自由は奪われてはいません。上に向かうこの目を開き続けること、それが信仰を持つということなのです。信仰とは状況に支配されずに、逆に支配しようとする自由な魂の祈りなのです。

癒されない病気はあるのです。しかし、癒されないことはありません。

イエスは「よろしい。清くなれ。」(3)

と手を差し伸べて触れられます。病いは不幸ではあまりせん。その人がその人らしくありのままが受け入れられて生を全うして行く人生の過程にイエスの十字架と復活が寄り添うのです。これを癒しというのです。